

女性の活躍を  
サポートします!

# 女性のチャレンジ通信

vol.6

地域活動や社会活動を始めたい、活動を広げたい、情報が欲しい…！  
そんな女性たちの“チャレンジ”をサポートする場所「女性チャレンジ応援拠点」。  
開室時間は常時女性のコーディネーターや専門スタッフが在室。  
あなたのお話をうかがいます。そんな拠点からお届けする、ニューズレターです。



## ❀ スタッフコラム「一年の計を重ねて、めざす未来へ！」

新しい年が明けました。平成最後の年始です。まだバブル景気が続いていた平成元年からこの30年間に、私たちの生活環境は様変わりしました。「終身雇用」も今は昔となりましたが、多様な生き方を許容する世の中にはなってきました。自分ならではの働き方・生き方を志向する人にとっては生きやすくなったと言えるのではないのでしょうか。ですから自己管理、「自分育て」には注力しましょう。自身を叱咤激励し、今年の「一年の計」を早々に確定させて、順次実践していきたいものです。旧年の流れを今年にうまくつなぎ、場合によってはうまく絶って、新しい動き・チャレンジを実行していきましょう。

そこで、新年にぴったりの『チャレンジであなたも人も成長する訓』を1つ、紹介します。

「一年の計を言葉にして文書にまとめ、

〈自分を動かす〉ツールにする！」

ずいぶん前から書く効用はよく知られていますから、実践されている方も多いでしょう。かつてクレオ大阪北（現在はクレオ大阪子育て館に移転）に数年前まであった女性起業家応援スペース【チャレンジオフィス】から羽ばたいたお一人は、当年の「計」を、



まず漢字一字で表すと話していました。漢字一字でないにしろ、当年を自分にとってどういう年にする

か、簡潔な言葉にして書き出すことはお勧めです。

その次に、仕事上とプライベート上のテーマをそれぞれ考えて、言葉に表す。さらに、仕事上で2つ、プライベート上で2つの実行項目を決めておくと、「一年の計」の基本ができるのではないのでしょうか。この「一年の計」を積みかさねれば、めざす未来に至るはずですから、「一年の計」は長い目でみるとなかなか重みのあるものです。みなさん個々人、ご自身の「一年の計」用のオリジナルフォームを作っておくのも一考です。そういうものはまだ作っていないという方は、ぜひ近々に作ってみましょう。

どんな風につくればいいのかちょっと悩む…という方は、どうぞ「女性チャレンジ応援拠点」をお訪ねください。スタッフがお話をうかがいながら、一緒に考えていきます。いつもあなたのチャレンジを応援する私たちスタッフです。みなさんのご来室をお待ちしております！

あなたにぴったりの活動のしかたを  
一緒に探していきます。  
まずはお気軽にお越しください！



スタッフ

## 🍀 イベント報告

女性チャレンジ応援拠点では、地域活動や社会活動を始めたい、活動を広げたい女性たちを対象に、ステップアップのきっかけになるようなワークショップや交流会などのイベントを開催しています。

企画担当者がホンネで話す！

## 人が集まる講座のコツ&依頼したくなる講師像+ランチ交流会

平成30年10月27日(土) 10時30分～13時

会場：クレオ大阪中央

講師：時任啓佑(株まなれば(OBPアカデミア)営業部マネージャー)

杉浦 愛(女性チャレンジ応援拠点スタッフ、大阪市男女いきいき財団 クレオ大阪企画担当者)

女性チャレンジ応援拠点に訪れる女性たちの中には、「イベントや講座の開催」に関わる相談や、講師業で活動していきたいという相談は多いです。

今回は、これから自主企画の講座を開催したい！という方向けに、人が集まる講座を企画するためのポイントと、担当者が「一緒に仕事をしたい」と思わせる講師像について解説する内容でセミナーを開催しました！

年間1,000を超えるセミナーを開催するコワーキングスペース、「OBPアカデミア」と、多様な対象に向けたセミナーやイベントを開催する大阪市立男女共同参画センターである「クレオ大阪」。民間と公共という2つのセミナー開催施設の企画担当者から本音の話を



聞く、というコンセプトには大きな反響があり、応募は早々に満員御礼。拠点リピーターのご利用者や、初めて拠点にアクセスするという方も含め、様々な分野の専門性を持つ女性や、これからチャレンジしたい！という女性たちにご参加いただきました。

前半では、講座を企画する時のチェック項目や企画の基本となる対象の考え方、講座タイトルの重要性や気を付けたい視点、担当者がどんな講師に依頼したいか…などを、後半では「選ばれ続ける」講師になるには、学びのプロセスを踏まえて、内容や自身の専門性をブラッシュアップするためには…といった応用的な話について、「担当者のホンネ」という視点とともに参加者にお伝えする機会となりました。



終了後のランチ交流会では、セミナー内で「交流会などでの名刺交換が講師依頼に繋がることも多い」という話もあり、活発に名刺や連絡先交換が行われ、大いに盛り上がりました！

後日、交流会での名刺交換をきっかけに、講座開催に向けて調整中です！という報告もあり、学びだけではなく、まさに新たな活動の場の広がりにつながったイベントとなりました！



### 参加者の声

「本当に具体的で役に立ち、欲しかった情報が得られて満足でした！」

「自分自身のスタンディングの大切さを痛感しました。」

「これからすべきことが明確になりました。」

「企画担当者の視点が理解できました。」

「どの事例も具体的にイメージしやすかったです。」

「今まで自分の中でごちゃごちゃしていたものが整理でき、

新たなアイデアも浮かんできました。」

## 🍀 チャレンジの先輩にきく！ 活動を始めるヒントvol.14

### 「真面目」な目標を

### 「優しい」イメージで発信したい！

早川 菜津美さん  
(babystep 代表)



### 妊娠・出産を通して募らせてきた違和感

もともとジェンダー（社会的文化的性差）に関する問題に関心があった早川菜津美さんが、自身の団体babystepを立ち上げたきっかけは、ある署名キャンペーンでした。

育児休業中に子どもと二人きりで過ごしていたある日、ベビー用品のパッケージに書かれた「全国のお母さんを応援します」という一文を見て、早川さんは違和感を覚えたといいます。「赤ちゃんの世話をするのは、お母さんだけなの？」という気持ちが湧きあがったのです。

就職活動などでは女性であることを理由に差別を受けたと感じることはありませんでしたが、妊娠・出産を経て、性的偏見を感じる事が急に増えていきました。例えば、友人に妊娠を告げた時の「仕事は辞めるの？」という何気ない一言。もし男性なら同じように聞かれることはないはず…とモヤモヤした気持ちが湧いてきました。出産後に、生まれたばかりの娘にかけられた「女の子だから…」という助産師の言葉にも「なぜ？」という気持ちを募らせたそうです。

そんなときに気が付いたベビー用品のメッセージ。いつもは「愚痴」としてこぼしていた感情でしたが、その時は違いました。夫や友人からの後押しもあり、署名サイトを使ってメッセージ変更を求めるキャンペーンを開始します。ダメ元でスタートしたキャンペーンでしたが、思った以上の反響があり5,000筆を超える署名が集まりました。署名に協力してくれた人たちの年代は幅広く、高齢の男性の「自分も子育てに関わりたかった」というコメントにも励まされたといいます。

### 「言われてみれば確かに…」と考える きっかけになれば

署名キャンペーンを始めたときは、これほど多くの人からの共感を得られるとは思っていなかったのですが、少しびっくりしたといいます。というのも、ジェンダーに基づく偏見や差別についての話をするのは煙

たがられるものと感じていて、ごく身近な人以外では、避けがちな話題だったからです。

キャンペーンサイトに寄せられたコメントの中では「これまで思ったことなかったけど、確かに変ですよ」という意見もありました。知り合いとの会話の中でも、ジェンダーや固定的な役割分担意識について「初めて考えた」という声は少なくなかったといいます。

このキャンペーンを通じて、「『育児＝お母さん』という考えは偏見だ」とわかりやすく表明することができたそうです。その意見に同意するかどうかは人それぞれですが、「一人ひとりにとって、新しい『視点』をもってもらうきっかけになったことは確かだ。」と、手ごたえを感じているそうです。

### 仲間がいるからできた

早川さんたちの活動は、新聞取材やインターネットでも取り上げられましたが、その中には賛同の声だけでなく、もちろん反対意見も寄せられました。取材で顔と名前が出ているので、「怖い」と思ったこともありましたが、心強い仲間と一緒にやっていることが支えになっています。

早川さんは、友人同士の集まりだったbabystepを、きちんと組織化し活動を続けていくことを決めました。「組織化する」と言っても、一体何をしたらいいのかわからない、そんな時に女性チャレンジ応援拠点の存在を知り、相談に来室されました。女性チャレンジ応援拠点は、子ども連れでも気軽に立ち寄ることができ、しかも無料でいろいろと相談に乗ってもらえる力強い存在だと感じるそうです。

babystepがめざすのは、ジェンダーにもとづく偏見について考える視点を、多くの人に持ってもらうこと。そんな少し“硬くて真面目”な目標を実現するために、“ふんわりとした優しいイメージ”で活動を進めていきたいと、早川さんはその方法を模索中です。



イベント「今読みたいジェンダーにとられない絵本たち」の様子

babystep twitterアカウント @babystep\_rep  
平成31年2月にクレオ大阪中央でセミナー「育児の“もやっと”座談会」を開催。

## 🍀 チャレンジの先輩にきく！ 活動を始めるヒントvol.14

### 「真面目」な目標を

### 「優しい」イメージで発信したい！

早川 菜津美さん  
(babystep 代表)



### 妊娠・出産を通して募らせてきた違和感

もともとジェンダー（社会的文化的性差）に関する問題に関心があった早川菜津美さんが、自身の団体babystepを立ち上げたきっかけは、ある署名キャンペーンでした。

育児休業中に子どもと二人きりで過ごしていたある日、ベビー用品のパッケージに書かれた「全国のお母さんを応援します」という一文を見て、早川さんは違和感を覚えたといいます。「赤ちゃんの世話をするのは、お母さんだけなの？」という気持ちが湧きあがったのです。

就職活動などでは女性であることを理由に差別を受けたと感じることはありませんでしたが、妊娠・出産を経て、性的偏見を感じる事が急に増えていきました。例えば、友人に妊娠を告げた時の「仕事は辞めるの？」という何気ない一言。もし男性なら同じように聞かれることはないはず…とモヤモヤした気持ちが湧いてきました。出産後に、生まれたばかりの娘にかけられた「女の子だから…」という助産師の言葉にも「なぜ？」という気持ちを募らせたそうです。

そんなときに気が付いたベビー用品のメッセージ。いつもは「愚痴」としてこぼしていた感情でしたが、その時は違いました。夫や友人からの後押しもあり、署名サイトを使ってメッセージ変更を求めるキャンペーンを開始します。ダメ元でスタートしたキャンペーンでしたが、思った以上の反響があり5,000筆を超える署名が集まりました。署名に協力してくれた人たちの年代は幅広く、高齢の男性の「自分も子育てに関わりたかった」というコメントにも励まされたといいます。

### 「言われてみれば確かに…」と考える きっかけになれば

署名キャンペーンを始めたときは、これほど多くの人からの共感を得られるとは思っていなかったのですが、少しびっくりしたといいます。というのも、ジェンダーに基づく偏見や差別についての話をするのは煙

たがられるものと感じていて、ごく身近な人以外では、避けがちな話題だったからです。

キャンペーンサイトに寄せられたコメントの中では「これまで思ったことなかったけど、確かに変ですよ」という意見もありました。知り合いとの会話の中でも、ジェンダーや固定的な役割分担意識について「初めて考えた」という声は少なくなかったといいます。

このキャンペーンを通じて、「『育児＝お母さん』という考えは偏見だ」とわかりやすく表明することができたそうです。その意見に同意するかどうかは人それぞれですが、「一人ひとりにとって、新しい『視点』をもってもらうきっかけになったことは確かだ。」と、手ごたえを感じているそうです。

### 仲間がいるからできた

早川さんたちの活動は、新聞取材やインターネットでも取り上げられましたが、その中には賛同の声だけでなく、もちろん反対意見も寄せられました。取材で顔と名前が出ているので、「怖い」と思ったこともありましたが、心強い仲間と一緒にやっていることが支えになっています。

早川さんは、友人同士の集まりだったbabystepを、きちんと組織化し活動を続けていくことを決めました。「組織化する」と言っても、一体何をしたらいいのかわからない、そんな時に女性チャレンジ応援拠点の存在を知り、相談に来室されました。女性チャレンジ応援拠点は、子ども連れでも気軽に立ち寄ることができ、しかも無料でいろいろと相談に乗ってもらえる力強い存在だと感じるそうです。

babystepがめざすのは、ジェンダーにもとづく偏見について考える視点を、多くの人に持ってもらうこと。そんな少し“硬くて真面目”な目標を実現するために、“ふんわりとした優しいイメージ”で活動を進めていきたいと、早川さんはその方法を模索中です。



イベント「今読みたいジェンダーにとられない絵本たち」の様子

babystep twitterアカウント @babystep\_rep  
平成31年2月にクレオ大阪中央でセミナー「育児の“もやっと”座談会」を開催。